

第3回 市町村・公民館等職員専門研修 実施レポート

日時：令和8年9月30日（水） 参加者：19名（うち市町村から8名）

会場：秋田県生涯学習センター 講堂

県内の生涯学習・社会教育関係職員や公民館、市民センター等の社会教育施設の職員に求められる資質や力量を高めることを目的として、今年度3回目の研修を行いました。テーマは「障害者理解に向けて～障害者の生涯学習支援を考える～」です。

【講話】

午前始めは、秋田県聴覚障害者協会 事務局長の **加藤 薫** 氏を講師にお迎えし、講話を行いました。加藤氏はご自身の生い立ちや体験を振り返りながら、途中で聴力を失った中途失聴者としての葛藤や、手話との出会い、当事者団体での活動について語られました。また、日常の買い物や病院、交通機関利用時におけるコミュニケーションのバリア、車や自転車の接近に気付きにくい危険性など、聴覚障害者が直面する社会的障壁について具体的な事例を挙げて解説されました。さらに、健常者と聴覚障害者が相互に理解し合い、対等にコミュニケーションをとることの重要性や、手話・筆談・指差しシートなどの多様な情報保障の重要性について示唆に富むお話をいただき、参加者にとって障害者理解を深める貴重な機会となりました。



【ワークショップ】

午前の後半から午後にかけては、秋田県生涯学習センター社会教育主事の **和泉 洋介** の進行によるワークショップを行いました。今年度は聴覚障害者の視点に立った街歩き体験として「デフバージョン」を実施しました。導入にあたり、和泉からは、「単なる疑似体験（『聞こえなくて不便・大変だった』という感情）で終わらせるのではなく、自らの業務や施設環境、街の仕組みにおける『課題（社会的障壁）』を発見し、どのように環境や対応を改善できるかという成人学習・主体的な学びの視点を持って臨んでほしい」という本ワークショップの目的と着眼点が伝えられました。参加者は2つのグループに分かれ、9つのミッションが書かれたカードや地図を確認し、ヘッドフォンや耳栓を装着して聴覚を制限した状態で、秋田県聴覚障害者協会の加藤薫氏、工藤憲一氏（会長）、手話通訳者の方々にも協力いただきながら山王地区への街歩きに出かけました。街歩き中、参加者は以下のような体験・検証を行いました。

- ・音による警告や車の接近音が聞こえない状態での歩行や横断歩道の横断
- ・声を出さずに飲食店でランチをとる体験や、筆談・指差しでの注文・会計
- ・バス停での時刻表確認や手話での簡単なコミュニケーションの実践
- ・指文字による暗号解読や聞こえない状態でのボッチャ体験



街歩き終了後は、各グループで体験を通して感じた「個人の感情」、「感じたバリア・社会的障壁」、「合理的配慮や改善アイデア」を付箋に書き出し、補足説明をしながら活発な意見交換を行いました。ワークショップの「まとめの一言」として、次のような振り返りの発表が行われました。

A班：「人の心・人の力」～お互いを思いやる意識と助け合いがバリアを無くす第一歩～

B班：「心の声を聞き合う」～当事者の声に耳を傾け、見えない不便さに気づく姿勢が大切～

最後に、加藤氏・工藤氏、および進行の和泉から「音声だけに頼らない情報保障（文字・掲示・視覚化）の標準化や、当事者との協働による学びの場づくりが今後の社会教育・施設運営において不可欠である」とのメッセージが伝えられ、研修を結びました。

【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・親切が度を過ぎるとお節介になると聞いて、「気持ち」や「心」に親身に寄り添っていきたく感じました。
- ・当事者の方の話を聞きながら活動できたのがとても良かったです。
- ・色々な配慮されていることに気づかされたが、これからもっと工夫が必要と思われるところに、気付くことができるようにしていきたい。